Hamamatsu Museum of Musical Instruments
浜松市楽器博物館だより
No. 2
1996.1.25

楽器のある風景 ― インドネシア　その1

トラジャ第121小学校

かつてセレベス島とも言われたスラウェシ島は、インドネシアを構成する13,000余の島々のほぼ中心部に位置し、面積18,000㎢、インドネシア第4位、世界第9位の広さを持つ島です。その中央部山岳地帯にタナ・トラジャ（トラジャの郷）と呼ばれる秘境があります。住民のトラジャ(=山の民）族は現在ではキリスト教徒ですが、同時に死者崇拝の精霊信仰を伝統とします。彼らは、死後の世界で幸せに暮らすために現世に仮に暮らしているといいます。ですから、死ぬことはすばらしいことであり、彼らの壮大な葬式については研究書や旅行案内書などにも詳しく書かれています。

ある日、そのトラジャのトンコ村、小高い丘に建つ第121小学校を訪ねました。珍しい竹のトランペット「バス」の合奏を子ども達が音楽の授業で習っていると聞いたからです。教室が3つの小さな小学校。2つのクラスは授業中ですが、残る1つは先生が不在らしく、子ども達は行儀良く自習していました。授業をしていたひとりの先生が、私達の不意の訪問に応えてくれました。音楽担当の先生は村のキリスト教会の僧を兼任しており、今ちょうど教会でミサ中とのこと。せっかく来てくれたのだから子ども達に演奏させましょうと言って授業を一時中断、何人かの子ども達が教室の外に集合しました。おそらく演奏が上手な子達なのでしょう。他の子ども達も思いがけない休憩で一緒に聞きました。

ドレミファソラシドそれぞれを一人が担当するこの楽器、モルッカ諸島（そこでは「ポンパン」と呼ばれます）からこの地に伝わったそうです。竹製横笛スリンがメロディーを奏で、バスは小刻みにハーモニーを作ります。それが“ポン”“パン”と聞こえます。少年達のちょっと恥ずかしそうで真剣な表情がほほえましく、軽やかな乾いた竹の音が、トラジャの郷の朝風に響き渡りました。

その夜、昼間不在だった先生が私達の宿を訪ねてくれました。我々の楽器に関心があるとはなかなか研究熱心な人だ、と私をほめてくれました。1セット欲しいのだがと言うと、いくらでもあるからいいよとのこと。先生の自宅の裏に生えている竹で先生が作るのだそうです。さっそく自宅に赴き各種のサイズ20本を分けてもらいました。おみやげにもらった子ども達の演奏のカセットテープ。ケースには“The Best Bamboo Orchestra,Tanah Toraja”と誇らしく英語でタイプしてありました。

資料収集記（ローゼンバウム・ファミリー・コレクション）―――― その1

92年2月、雪の成田を後にして、飛行機は一路、ニューヨークのケネディ空港へ。飛行中はゴーという音以外は何もなし。うつらうつらと惰眠をむさぼり“成る程、ゴルゴ13はこうした時間差を利用して事を成し遂げるのか”といった事など思っていると、到着しましたニューヨークです。

そこから車で小一時間、閑静な森の中に、ポツポツと町場、その一角にホテル。ホワイトプレーンという所は、何でもIBM（コンピューター会社）関連の企業が多いところとか聞きました。

早速ローゼンバウムさんのお宅に挨拶に伺いました。周りにはリスがいっぱい、あちらへうろうろ、こちらでキョロキョロ。素敵なお宅です。

翌日から作業です。まず、浜松市で作った荷札をリスト（通産省のワシントン条約、外国為替管理法をパスするために作成したもの）と照らし合わせ、各楽器に付けました。これが大変な作業です。写真と実物を照らし合わせたり、楽器に刻まれている様ざまな特徴をしらべたり。特にオーボエとかファゴット、フルート、クラリネットなど管楽器の類は、数が多くどれをみても同じようにみえました。

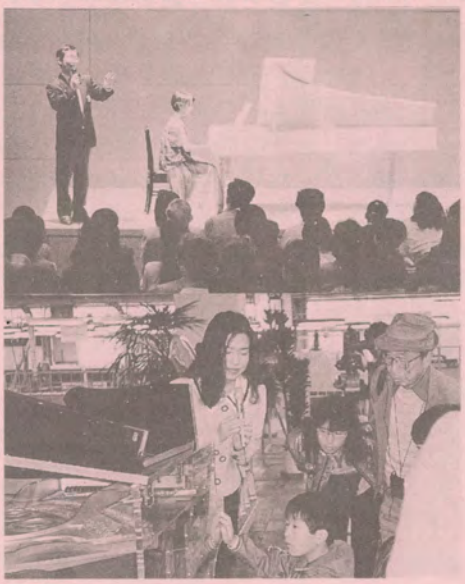
次に梱包です。楽器を分離したほうがいいか、そのままの状態で包み込むか判断します。分離する場合はまたまた荷札で番号付け。後で元に戻すためです。薄用紙で包み込みますが、キズが付きそうな所には紙やひもで固定をします。その上にクッションをあてます。外包には、エアーキャップというクッション材をあて、楽器の番号を記して、外箱詰めです。ダンボールに入れたり、大きなものは木枠の箱に入れます。最後は、輸出用の大型木箱（カラオケボックスと同じくらい）に入れ、完了です。大変な作業でしたが、関係者の努力により、無事日本へ着きました。ヤレヤレです。

事　業　報　告

レクチャーコンサート・シリーズ5
ピアノの原点

11月4日（土）午後3時　研修交流センター21音楽セミナー室
ピアノ演奏：伊藤深雪　　解説：嶋　和彦（楽器博物館学芸員）中山　真（復元設計者）

イタリア人バルトロメオ・クリストフォリによって1700年頃に発明されたピアノ。その復元品（楽器博物館展示品）を使っての演奏と解説で、ピアノの構造と音の原点に触れました。ピアノというよりもむしろチェンバロのような繊細な音色、そして歴史上最初のピアノ曲といわれるジュスティーニのソナタなどを、クリストフォリの人物像や楽器復元のエピソードを交えながら楽しみました。



見学学習会・楽器ができるまで

11月25日（土）午前10時～午後3時20分
見学先：チェンバロ製作家、佐藤　亮さん宅
　　：ヤマハピアノ工場（講演：竹村さん）

すがすがしい晩秋の一日、チェンバロ工房とグランドピアノ工場を見学しました。

チェンバロ工房では、設計や製作などについて、チェンバロの各部位や図面を示しながらのお話をしていただきました。グランドピアノ工場では、係の方に案内をいただきながら見学コースをまわり、また、ピアノ設計をされている方より、音作りについて講演をしていただきました。

参加者は楽器への親しみが増したことと思います。

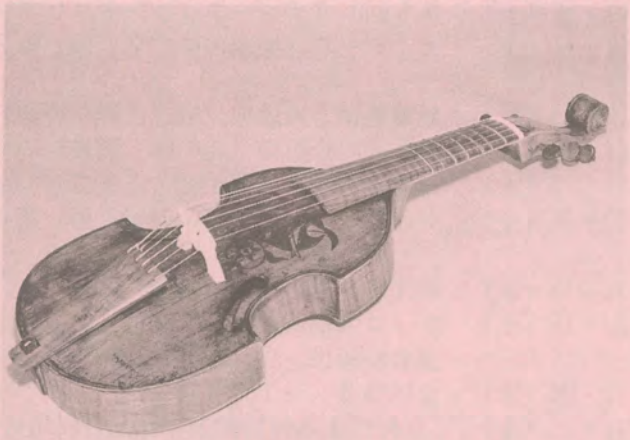
収蔵資料の紹介 ②

ヴィオラ・ダ・ガンバ

ヴィオルはヴァイオリン族（ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの仲間）の前身の楽器で、ヴァイオリン族が発明される以前の16、17世紀に活躍していました。ヴィオルには小型でヴァイオリン程の大きさのトレブル、チェロと同じくらいのバス、その仲間のテナーなどがあり、ヴァイオリン族と同じような編成です。

ヴィオルは足にはさんだり、ひざの上にのせて演奏する姿から、イタリア語で「足のヴィオル」という意味のヴィオラ・ダ・ガンバという名でよく呼ばれています。

ヴィオルとヴァイオリン族は大変似ていますが、次のような違いがあります。まずヴァイオリン族の指板には弦を押さえる場所を示すものが何もついていませんが、ヴィオルにはフレットという指板を区切る線が半音ごとにあります。したがって、どこを押さえれば何の音が鳴るのか簡単に分かります。フレットは他の楽器では金属を使いますが、ヴィオルではガット（羊の腸をよったもの）を巻きつけて使います。弓の持ち方はヴァイオリン族と逆で、手の平を上に向けるように持ちます。弦はヴァイオリン族では金属の弦を使いますが、ヴィオルはガットを使います。



これがヴィオルの柔らかく、やさしい音を生み出します。しかし音量が小さいので、大きなホールには適していませんでした。そのためヴァイオリン族が発明されると、ヴィオルはあまり使われなくなりました。しかし最近ではこのヴィオルの音色を愛する人が増え、古楽器の演奏会などでその音を楽しむことができます。

展示コーナーの紹介 ②

オーボエのなかま

オーボエという名前は、フランス語の haut（高い）、bois（木）という呼び名に由来しています。オーボエが「高音の（または音が大きい）木管楽器」（平凡社「音楽大事典」より）であるところからこう呼ばれたのでしょう。

西洋音楽で使われるオーボエのなかまは、音の高い順から、*オーボエ、オーボエ・ダモーレ、*イングリッシュ・ホルン、*ヘッケルフォーン（＊印は展示品あり）等があります。これらは全て、「リード」と呼ばれる南フランス産の葦の茎からつくられた板を２枚重ねて音を出す仕組み（発音原理）になっています。この二枚のリード（ダブル・リード）を持つ楽器を、ダブル・リード楽器と呼びます。

現在、葦やわらなどのイネ科の茎からつくられたダブル・リードを持つ楽器は、広く世界にわたって存在していますが、その祖先は古くペルシャからインドにかけて存在した「ズールナイ（サーナイ）」である、というのが定説になっています。この楽器が十字軍遠征やイスラムとの通商を通じて12世紀に西洋に伝わり、その後改良を重ね14世紀頃ヨーロッパ独自の「ショーム」（展示品あり）が登場しました。これが現在のオーボエの直接の先祖で、バロック時代の初期（17世紀頃）まで活躍しました。繊細な美しさを持ったオーボエの音色に較べ、ショームの素朴で力強い音色は、アラビアやトルコといった国々を我々に思い起こさせてくれます。

日本のダブル・リード楽器の代表とされる篳篥（ひちりき）は、奈良時代に仏教とともに中国（当時の唐）から、ラーメン屋さんの小道具として欠かせないチャルメラは戦国時代にポルトガルから伝わりました。これらも、発音原理からみるとオーボエと同じ仲間の楽器であることがわかります。

10月～12月までのあゆみ

年月日	内　　容
平成７年	
10・１（日）	第４回レクチャーコンサート「中国琵琶の世界」。
10・14（土）	ゼミナール「楽器の中の聖と俗」第２回「オリンポスの神々が奏でた楽器」 講師：大阪音楽大学教授　西岡信雄氏。
10・28（土）	佐久間町下川合の「花の舞」調査。
10・29（日）	体験学習「親子でつくろう創作楽器２：空き缶のバンジョーをつくろう」（於：浜松科学館）。
11・３（金）	文化の日に伴う無料開館、観覧者2,243名。
11・４（土）	第５回レクチャーコンサート「ピアノの原点」。
11・11（土）	ゼミナール「楽器の中の聖と俗」第３回「楽器の性象徴」 講師：大阪音楽大学教授　西岡信雄氏。
11・19（日）	観覧者10万人達成、記念式典が行われる。
11・22（水）	佐久間町今田の「花の舞」調査。
11・25（土）	見学学習会「楽器ができるまで」。　浜松市楽器博物館だより創刊。
12・９（土）	ゼミナール「楽器の中の聖と俗」第４回「呪術としての音」 講師：大阪音楽大学教授　西岡信雄氏。
12・13（水）	水窪町草木の「霜月神楽」調査。
12・16（土）	アクロス福岡において開催される「浜松市楽器博物館展」（会期：12月19日～27日）の出品資料搬出。
12・28（木）	全館燻蒸（～１月３日）。
12・29（金）	「浜松市楽器博物館展」出品資料搬入。

これからの事業スケジュール

平成８年２月25日（日）　14：00～16：00　研修交流センター　（申込制）
　講座「浜松・音の考古学－音具にみる年中行事」講師：当館学芸員
　市内や近郊から出土した音具・楽器から、年中行事のルーツを探っていきます。
平成８年３月１日（金）～17日（日）
　新着資料紹介
平成８年３月２日（土）開場14：30　開演15：00　研修交流センター
　第７回レクチャーコンサート「フランス・バロックの華 ― チェンバロとヴィオラ・ダ・ガンバ ―」
　当館所蔵のチェンバロと、ヴィオラ・ダ・ガンバによる演奏とお話です。
平成８年３月16日（土）14：00～16：00　研修交流センター　（申込制）
　講座「県内の芸能調査」中間報告会　講師：当館学芸員
平成８年３月24日（日）13：30～16：00　浜松科学館　（申込制）
　体験学習「親子でつくろう創作楽器３」
　ハーモニカ渡来100周年を記念して、親子でハーモニカづくりに挑戦します。

利　用　案　内

開館時間：火曜日～日曜日　午前９：30～午後５：00
休 館 日：月曜日（祝日にあたる時は開館）、祝日の翌日、12月29日～１月３日
　－祝日前後の開館日については、変更することがございますので当館にご確認下さい。－

観覧料：	個人	団体(20人以上)	団体(80人以上)
大人（大学生以上）	400円	320円	240円
中人（高　校　生）	200円	160円	120円
小人（小・中学生）	100円	80円	60円

※館内には、貴重品以外のお荷物は持ち込みできません。

浜松市楽器博物館だより
1996年１月25日発行
No.2
編集　浜松市楽器博物館
〒430　静岡県浜松市板屋町108－1
ＴＥＬ　053－451－1128
ＦＡＸ　053－451－1129
印刷　株式会社　シバプリント